

VERSION JAPONAISE ET COURT THÈME

I. VERSION

変圧器を買いに行くんです、と道子は独り言を行った。誰にも尋ねられたわけでもないのに言い訳をしているのだった。変圧器など、どこにも売っていないかも知れなかつた。売っているとしたら中央駅のそばのシュピタル通りの店にあるだろうと思ったものの、そちらへ向かうのは気が進まなかつた。しゃれた通りを何か買うために歩いて行くことのできるような日ではなかつた。それでも電圧を変えないわけにもいかないから、と道子は自分に言い訳するように独り言を言った。本当は行きたいところがあるのに恐ろしいので先へ先へ延ばしているようでもあつた。本当に行きたいところが他にあることは道子にも分かっていた。ただ、それがいったいどこなのかが分からないのだった。

華やかなショーウィンドウの列が霧の中に光のトンネルを浮かび上がらせていた。光りながら両側から人々を押し潰そうとする商品の山にはさまれて、道子は伏し目がちに歩いていった。伏し目がちなので人間たちの顔は目に入らず、シェパード犬が一匹でパートの前に座っているのが目に入った。その横にはサングラスをかけた男が道に正座していた。男の前に黒い箱がひとつ置いてあつた。箱の中から一マルク硬貨がいくつか光って見えた。道子は足を止めた。向こうから小肥りの女がひとり、ハンパーをかじりながら歩いてきた。女はシェパードを見ると無表情のまま、パンの残りをその方に投げた。シェパードは少女のように悲鳴をあげて飛び退いた。トマトケチャップか口紅か血液か赤いしみのついたパンのかけらを、シェパードは魔物を見るような目にらみながら吠え続けるのだった。小肥りの女は、お恵みが受け入れられなかつたので侮辱を感じたのか、金切り声で笑い出し、あんたパンが恐いの、お馬鹿ちやんだね、パンが恐いなんて、と言いながらシェパードに近づいていった。シェパードは怯えて激しく吠えながら更に一步後退し、デパートの壁にぴったりと身を押しつけた。その時、サングラスの男が傍らに置いてあつた長さ一メートルほどの木の棒を握りしめて立ち上がつた。まわりで、その場の成り行きを見るともなく見ていた女たちの間から、悲鳴があがつた。小肥りの女は声も出せずに青ざめてその場に立ちすくんでいた。サングラスの男はの方を見ているわけではないのだった。サングラスの男は単に立ち上がって、別の場所へ行こうとしているのだった。手に握りしめたのは、人を殴る棒ではなく、歩くための杖だった。

変圧器ありますか。道子は家庭用品を扱う大きな店の電気製品売り場に入ると、落ち着きを装って尋ねた。見当外れの質問をしているような気がするのは、本当に知りたいことを尋ねずに、本当に行きたいところへ行かずに、どうでもいい用事を済ませとしているからなのだと自分に言い聞かせながら、落ち着きを装って尋ねたのだった。

多和田葉子 『ペルソナ』 (1992)

II. THÈME

Parmi les personnages du drame, du moins les principaux, elle, qui avait quinze ans à l'époque et plus de trente aujourd'hui, reste la seule, ni morte ni enfuie, qui vit toujours à Raze. A quinze ans on entre au lycée, elle était encore au collège. Marie-Jo fait des études, disait la mère aux voisins. Sans goût ni réussite, sans bien savoir quelle sorte de grand large ces heures passées assise qu'elle endurait comme un mal nécessaire un jour lui ouvriraient. Coiffeuse, répondait-elle pourtant lorsqu'on lui posait la question.

Thierry Hesse, *Le cimetière américain*, éd. Champ Vallon, 2003.

Tournez la page S.V.P.